

はしがき

一、本書は、中世・近世の日本文芸の代表的作品を、なるべく多く掲げるようにつとめました。ただしそのために、各資料があまりに断片的になって、その作品の真の姿を見失うようなことがあったり、学習の興味をそぐことがあったりしてはならないと考えて、できるだけ本書に掲げた資料だけで、その作品の全貌がわかるようにしましたし、またそれが不可能な場合でも、その作品の特質は、本書の資料だけでいちおう理解できるように、十分考慮しました。なお作品を選ぶにあたっては、特に国語の基本的語句の知識の習得が達成されるように注意しました。

一、頭注は、学習者がほかの参考書を用いなくても、自分で下読みができる程度に、やゝ多く付けました。

一、各作品の前に、作者・作品に関する解説を付けて、学習の便を計りました。

一、はじめに概観を、おわりに年表を添えました。本文・解説とあわせて、中世・近世の文学史のだいたいに通することができようと思います。

一、各資料には、さし絵を豊富に入れ、国語学習を楽しみながら、おのずから効果があがるようにしました。

出典

研究書

要注 中世・近世文芸新抄 目次

はしがき	二
中世・近世文芸概観	五
新古今和歌集	九
金槐和歌集	一六
平家物語	二八
宇治拾遺物語	四四
方丈記	五三
十六夜日記	五九
徒然草	六四
太平記	七九
増鏡	八五
謡曲(隅田川)	九〇
花伝書	一〇四
狂言(薩摩守)	一〇八
連歌	一一九
御伽草子(一寸法師)	一二三





伊曾保物語	二五
近世和歌	二九
近世俳句	三三
狂歌・川柳	三六
浮世草子	四〇
西鶴諸国ばなし	四四
日本永代蔵	四四
世間胸算用	四七
大笹の文	五五
去来の抄	六一
丹波与作	六四
難波みやげ	七九
雨月物語	八五
春風馬堤ノ曲	九三
鶉衣	九五
玉かづま	九九
おらが春	一〇七
南総里見八大伝(芳流閣)	一一一
中世・近世文芸史年表	一一八

### 中世・近世文芸概観

#### 中世

源頼朝が征夷大將軍に任ぜられた建久三年(一一九二)から、徳川家康が江戸幕府を開いた慶長八年(一六〇三)頃までを中世とよび、また鎌倉室町時代ともいう。封建制社会の時代のほぼ前期に当たっている。これをさらに、前、後二期に分けてみることもできる。前期(鎌倉時代)は中古のあとをうけて、依然として貴族的文芸が盛んであったが、武家の生活・文化の浸染を免れ難く、武家を対象とする新文芸も現れるにいたった。一方中世は仏教の全盛期であって、その影響も著しく、仏教文芸が作られたのみならず、あらゆる文芸が宗教色を帯びている。このように新と旧、公家・武家・僧侶の渦巻がこの時期の文芸を形造っているともいえよう。後期(南北朝・室町時代)もそういう流れを受けているが、その中に貴族的なものが薄れ、庶民的傾向が濃くなってゆくように思われる。

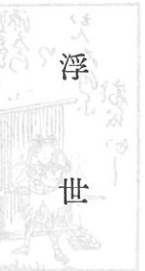
和歌は初期に新古今集が出て、古代和歌の到りついた境地を示したが、以後漸次衰退の途をたどった。新古今から室町初期の新統古今集まで、中世に編纂された勅撰集は十四集に達するが、玉葉・風雅両集を除いては二条派の平凡なものが多い。連歌がこれに代って南北朝頃から盛んになり、室町時代を通じて行われた。菟玖波集・新撰菟玖波集が代表的な撰集であるが、末期には俳諧連歌が起り、近世への先駆をなしている。

漢詩文は南北朝前後に五山禪僧によってすぐれた作品が生み出された。これを五山文学という。歌謡を集めたものには鎌倉時代の宴曲集、室町時代の閑吟集などがある。

鎌倉時代には中古の物語文芸を摸した長篇の擬古物語が、住吉物語・松浦宮物語・岩清水物語など創作されていたが、室町時代に入ると、短篇で分り易い御伽草子が非常にたくさん現れるようになった。平家物語・太平記等の軍記物語は、中世に新しく出現した歴史文芸であるが、その内容と語り物という事と相まって、広汎な層に行われた。説話文芸も中世に流行したものの一つで、宇治拾遺物語・

浮世草子

井原西鶴



元禄時代を中心としてその後約八十年間に作られた小説を浮世草子という。浮世は現代乃至は好色の意である。その代表作家が井原西鶴である。彼は本名平山藤五、大阪の商人であったが、早く隠居して文芸の世界に遊んだらしい。はじめ談林派の俳諧師として名声を馳せたが、四十一歳頃から小説作家に転身し、元禄六年(1691)五十二歳で没するまでの十数年間に多くの作品を書いた。彼の作品は、処女作、好色一代男などの好色物、武家の義理等を扱った武家物、町人の経済生活を描いた町人物、その他に大別されるが、どれも雅俗折衷の俳諧的な文体に特徴があり、題材のとりえ方と話の面白味において他の追隨をゆるさぬものがある。特に当時の社会を冷かな眼を以て活写しようとした点と、経済生活を重視した現実的な町人文芸を樹立した点とは、注意さるべきであらう。

こゝには、諸国の珍談異聞を集めた「西鶴諸国ばなし」(一名大下馬。貞享元年(1684)、四十三歳の作)と、町人物の傑作といわれる「日本永代蔵」(一名大福新長者教。元禄元年(1696)、四十七歳の作)、「世間胸算用」(副題、大晦日は一日千金。元禄五年(1698)、五十一歳の作)からそれぞれ一編を選んだ。本文は藤村作博士訳註「西鶴全集」によった。

大晦日はあはぬ算用  
概ねし、栗の皮も剥いで、冬は寒く、春は暖か、夏は暑い、秋は涼しい、四季の変わり目、自然の成り立ち、人間の生活、世間の道理、これらが、西鶴の筆から溢れ出す。この文章は、簡潔で、読みやすく、現代でも愛される。...

西鶴諸国ばなし 本文

- 一 かやの実。
- 二 神様に飾る松。
- 三 菌糸(しだ)。裏白。
- 四 反をうつともいう。今にも刀を抜こうとするさま。



樅



やま草 (しだ)

- 五 医者。
- 六 貧病。貧乏という病。
- 七 とりわけ懇意に語り合う。
- 八 すべてで。総計。
- 九 厚紙に渋をぬり、やわらげたものでつくった着物。極めて粗服で貧乏人の着るもの。
- 一〇 紙子浪人という語もよく用いられた。
- 一一 助力、めぐみ、施し。
- 一二 思いのまゝの。
- 一三 前に述べた事。

大晦日はあはぬ算用

樅、から栗、神の松、やま草の売声もせはしく、餅つく宿の隣に煤をも払はず、二十八日まで髭も剃らず、朱鞆の反をかへして、「春まで待てといふに、是非に待たぬか」と、米屋の若い者をにらみつけて、すぐなる今の世を横に渡る男あり。名は原田内助と申して、かくれもなき浪人、広き江戸にさへ住みかね、この四五年、品川の藤茶屋のあたりに店借りて、朝の薪に事を欠き、夕の油火をも見ず。これは悲しき年の暮に、女房の兄半井清庵と申して、神田の明神の横町に薬師あり、このもとへ無心の状を遣はしけるに、度々迷惑ながら見捨て難く、金子十両包みて、上書に「ひんびやうの妙薬、金用丸、よろづによし」と記して、内儀の方へ送られける。内助喜び、日頃別して語る浪人仲間へ、酒一つ盛らんと呼びに遣はし、幸ひ雪の夜のおもしろさ、今までは崩れ次第の柴の戸を開けて、「さあこれへ」といふ。以上七人の客、何れも紙子の袖を連れ、時ならぬ一重羽織、どこやら昔を忘れず、常の礼儀過ぎてから、亭主罷り出て、「私合せの合力を請けて、おもひまゝの正月を仕る」と申せば、各々「それはあやかりもの」といふ。それにつき上書に一作ありと、件